

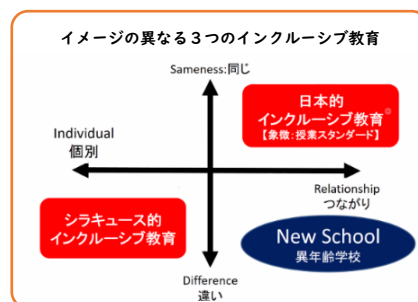
早稲田大学インクルーシブ教育学会 ニュースレター

2022年度(令和4年度) No.5

日本のインクルーシブ教育の在り方 ～ アメリカの小さな異年齢学校を通して ～

第5回研修会では、発達心理学/インクルーシブ保育・教育がご専門の赤木和重先生に日本やアメリカの様々な実践をご紹介頂きながら、これからの日本のインクルーシブ教育の目指す方向について考えました。導入から「インクルーシブ教育とは『多様性をまとめる』ことではなく『多様性を創り出す』ものではないだろうか」等はっとさせられるお言葉が多く、実りの多い研修会となりました。

赤木先生は今回、先生が実際にこれまで見てこられたインクルーシブ教育の実践を、右図のように分類して紹介してくださいました。同じ「インクルーシブ教育」という言葉で括られる3つの実践ですが、「違い」と「同じ」、「個別」と「つながり」という2つの基軸をもとに整理していくと、そこには違いがあることがわかってきます。



「日本のインクルーシブ教育は、目指すハードルが高すぎる？」

赤木先生によれば、日本的インクルーシブ教育には、「同じ」「つながり」という2つの特徴があります。日本人は生物学的な身体的特徴が同じ割合が高く、言語や文化背景もよく似ています。そのため教育現場でも同質性が強調され「他の子と同じように」を子どもたちに求めることが多くあります。また同じ学年なら同じカリキュラムをどこでも受けられるようにしているため、その「同じ」から外れた子をどうするかということが課題として取り上げられる傾向もあります。

このような中で子どもたちが相互に関わり合う「つながり」のインクルーシブ教育を目指しても、みんなと違う行動をする子どもはどうしても目立ってしまい、学校が多様性を受け止めきれずに生じる問題が全国で多発しています。皆と同じように学び、かつ、友達同士のつながりを求める日本のインクルーシブ教育は、実は相当にハードルが高いものなのかもしれません。

「みんな違いすぎて、違いが気にならないアメリカの学校」

他方、アメリカの学校には、そもそもの前提として一人ひとりに違いがあります。皮膚や髪の毛の色、宗教や言語までが違うため、カリキュラムが学校や個人によって違うことも当然です。そんな中にあると、子どもの特性の違いもあまり目立ちません。赤木先生が見学されたアメリカのシラキュースにある公立学校では個々の違いを互いが認め合っており、アセスメントに沿った個別カリキュラムが用意されている等、非常に進んだインクルーシブ教育を行われていたそうです。

また赤木先生は、この学校には意図的には子ども同士をつなげようとはしない「個別」という特徴もあったことも指摘されました。授業から外れて行動をしている子どもに他の子が声をかけると「Mind your own business! (自分のことに集中しなさい)」と言われますし、子ども同士の関係性を教師が仲立ちすることもありません。違いは尊重するけど、その違いのままでかまわないし、あえてつなげようとはしないインクルーシブ教育です。

「みんな違う。だけど、つながり合うインクルーシブ教育」

赤木先生が最後にご紹介された The New School という私立学校は、「違い」と「つながり」を特徴としていました。幼稚園児から中学生までと一緒に学んでいて、子どもたち一人ひとりにあったコントラクト（個別学習計画表）が作られており、授業形態もそれぞれのニーズに合わせて個別学習になったり異学年の子との協同学習になったりと様々です。近い年齢の子たちと一緒に机に座って英語を勉強する時間もありますが、模擬裁判の授業では中学生が幼稚園生を説得しようと必死に言葉を選びますし、英語が苦手な子は自国文化の遊びを友達に教えてあげるなど、お互いが関わり合う中でそれぞれの違いから多くを学ぶ授業がつけられています。

特性も年齢も違う子どもたちが集まるこの学校では、子どもたちがそれぞれの違いを尊重し合いながらつながり合い、その能力差や年齢差こそが意味を生成する学びを育てています。



「毎日一ミリずつ、変えていこう」

アメリカの事例と比べていくと、日本のインクルーシブ教育がもつ特徴が浮き彫りになります。どのインクルーシブ教育が良いか悪いかということはありませんが、「同年齢・同一内容学習」という前提の中で多様性を生み出そうとする日本のインクルーシブ教育はハードルがあまりにも高いのかもしれない。教員にも同調性が求められる日本の現場で、いきなり The New School のような取り組みを行うにも難しさがあります。

最後に赤木先生は、それぞれの現場や授業で、できることを少しずつやっけていこうとお話してくださいました。同じ学習目標に全員が向かう授業であっても、その取り組み方は生徒が自由に選べるようにすることはできますし、先生が教室に遊び心を加えて子どもが自由に自分を表現できる環境を整えることもできます。そうした小さな変化の積み重ねが、いつか大きな変化につながって、これからの日本のインクルーシブ教育の在り方を変えていくのかもしれない。

ご参加頂いた皆様からの感想 <<一部抜粋>>

多様性をまとめるのではなく、多様性を作り出す
違いすぎて違いが気にならないという言葉が印象に
残りました。素敵なお話をありがとうございました。

アメリカ2校、日本のインクルーシブ
教育の実際を織り交ぜて紹介いただいたので、自分で比較したり取捨選択したり
できたことがありがたかったです。

アメリカのインクルーシブ教育の例を知ること
で、日本の教育の特徴やインクルーシブ教育の考え方
や課題について考えることができました。
まずは、ひとつ試みること、そして身近な人に自分の
試みを話してみることから始まるのかもしれないと感じ
ました。ありがとうございました。

アメリカのインクルーシブ教育から
は、日本では過度なつながりを求めて
いないかという視点と、一人一人を深く
理解して長期スパンでの育ちをもつと
いう視点をいただきました。

インクルーシブ教育や合理的配慮を進めていくときに、子どもたちとも相談して、自分に合った学
びやすさの内容や方法、形態を選んでいくことが道筋を作っていくことを再確認しました。研修など
を組織して自分自身も同僚、管理職も巻き込んできましたが、抵抗がある時は合法的に1ミリでも進
められるようにしなやかに取り組んでいきたいです。3つの方向性の事例が大変参考になりました。
ありがとうございました。

第6回研修会は3月19日（日）9：00～12：00を予定しています。
皆様の参加を心よりお待ちしております。